

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

ホームページ <http://shakaitsushin.cool.coocan.jp/> e-mail: shakaitsushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八―二九〇四 電話・FAX(03)3299―5367

郵便振替 〇〇―〇〇―九一五八四三一 労金 中央労金本店 No.1154163

〈もくじ〉

■ 巻頭言 ■

「新社会党の現状と「党の哲学」

蓑輪 泰臣 … 2

『ゴータ綱領批判』について

滝野 忠 … 3

― 斎藤君はマルクスをどう歪めているか (六) ―

斎藤幸平君の主張を改めて検討する 原野人 … 7

◇ 信州松本通信 ◇

信州松本でヴァンパータール交響楽団の

「英雄」を聴く 中澤 秀行 … 11

― エンゲルスと「ヴァンパータールだより」のことども (下) ―

読者からのおたより …………… 14

編集部だより(「はじめの一步」― 21年総選挙について) …… 14

旬刊 社会通信

NO.1348

二〇二一年十一月五日

二〇二一年十一月五日発行
(毎月一日・一日二回発行)

新社会党の現状と「党の哲学」

「迷路に入ったら原点に返れ」、党の不団結要素が露呈されてきている新社会党の現状を見るにつけて、「迷路にはいったら原点に返れ」、来た道を引き返し、党建設の初心に帰れ、これが私の、いま思うことである。この思いを的確にとらえた本が私の「本棚」にある。(労働大学の推薦本) モーリス・コーンフォース著『唯物論と弁証法』弁証法的唯物論入門』

マルクス・エンゲルスは、労働者階級は自分自身の党を持たなければ、けっして資本主義に勝つことが出来ない。社会全体を導いて資本主義の廃止と社会主義の建設に前進することはできないことを我々に教えている。

レーニンは、党についてのマルクス主義の教えをさらに発展させた。レーニンは、党はその階級の前衛として、すなわち自分の階級のうちの最も意識的な部分として活動しなければならぬこと、また党は政治権力を奪い、その行使するための道具であることをしめした。

このような任務を党がはたすためには、党は知識、ものごとを理解する力、みぬく力を持たなければならないことは明らかである。いいかえれば、党はその政策の基礎となり、その諸活動に方向を与えるマルクス主義の理論でもって武装されなければならない。この理論がマルクス・レーニン主義の理論である。それは一つの世界観Ⅱ哲学である。経済的政治的見解は、一般的な世界観から独立したものではない、また独立したものではありません。

労働者階級の社会変革をめざす党は、その党の哲学をはつきりまとめあげ、そしてそうしながら、それをしっかりともちつづけ、発展させ、大切にせざるをえない。

この哲学、「弁証法的唯物論」のなかに具体化された一般的思想を用いて、党はその変革しようとする世界を理解し、またこの一般的思想にもとづいて党はその目的を定め、その目的をはたすためにはどうたかすべきかを考えだすのである。この哲学のなかに具体化された一般的思想をもちいて、党は、闘争の各段階からひき出さなければならぬ結論をしめしながら、また、どうやって社会主義にむかって進むべきか人びとが自分自身の経験から学ぶのを助けながら、階級全体を啓蒙し、組織し、そして全労働者大衆に影響を与え、彼らを指導し、味方にひきつけるのである。

労働者階級の世界観、社会主義のための闘争の世界観をえらばなければ、われわれは資本主義の世界観、社会主義に反対する闘争の世界観をえらぶことになる。あるいは、思わず知らずそのなかにすべりこむことになる。

それだからこそ、労働者階級の党は、それが自分の階級を真に正しく正確に指導するのであって、敵の資本主義的思想やそういう思想に相応した政策を持ち込んで自分の階級を誤り導くべきではない。自分の革命的哲学をつくりあげ、それをまもり、普及させることにつとめなければならない。

このように指摘している。原点に返り、マルクス・エンゲルス・レーニン・向坂逸郎の思想文献を今こそ勉強しよう。

(蓑輪 泰臣)

『ゴータ綱領批判』について

— 斎藤君はマルクスをどう歪めているか (六) —

週刊新社の「おわび」記事

仕事が多量の誌紙をみます。新聞は豊かな情報を時間と空間いっぱい提供してくれます。テレビ、インターネットはいけません。その時ぐらし、落ちつきません、一方的に垂れ流されますから、思考が断たれ、じっくり考えることができませぬ。

政党の機関紙で唯一参考になるのは『赤旗』、他はだめです。参考にも勉強にもなりません。おれたちの政党はこういう主義・主張にもとづき、日常行動に励んでると、活動を前面に出せばいいのにそれありません。長い論文、書き手はどこもいつものしよ、思想的モザイクの金太郎アメです。

何十年もとっているのに、利用できる記事がないのが身近な機関紙、だからこそ、頑張っている人がいる『週刊新社会』です。はじめて記事にできる小さなニュース発見です。

「労働短信記事に関する謝罪」、内容はこうです。

【9月28日付本誌6面、「労働短信」において、斎藤幸平著『人新世の資本論』の批判が掲載されました。批判は一方的であり、斎藤幸平氏の人格をも傷つけるものであり、また「労働短信」の趣旨にもそぐわないものでありました。このコラムは「伊勢氏」の個人的見解ですが、掲載の責任は編集部にあります。記事を撤回・削除するとともに、斎藤氏及び読者、関係者にも深くお詫びいたします。機関紙局長 長南博邦】

だれがなにの目的で編集部にいちやもんつけたかは、くわしくは知りません。伊勢氏を悪魔のように憎んでいる人がいるのでしょうか。おどろおどろしい詫び文で、編集長どのの編集者としての自信、権威がみられません。内容はいかん、と9月28日号を古新聞の山からひっぱり出しました。

【『人新世の「資本論」』（斎藤幸平著）は冗舌で薄学な本。はつきりしていることはマルクスの学説を、自分の作った案山子に合わせ、剥いだり着せかえたりし、歪曲、否定していること。彼は「これまでのマルクス主義の焼き直しはしない」「これまでの古びたマルクス主義解釈を繰り返さない」と、マルクス主義を全面的に否定、歪曲する。

彼の問題意識は労働者階級の搾取から解放でなく、はやりの環境危機からの「地球と全人類」の救済、「世界の人類はみんな友達」、「市民」の階級協調。斎藤氏は唯物史観（階級対立）を、「時代遅れのイデオロギー」、「これが現代のマルクス学」と全面的に否定し、『資本論』の改悪を始める。この本を手にした仲間が抑える勘所である。（伊勢）】

この稿、どこか間違っているとありますが、どこが斎藤君の人格を傷つけるのでしょうか。ぼくは正しく思えます。斎藤君は悪意ある目的意識からマルクスを歪め、改ざんし、本当のマルクスではないマルクス像を描き、労働者に、あるいは社会主義について学び考えたいとする人々を誤り導こうとしています。

新社会党は社会主義政党です。綱領「21世紀宣言」はそう宣言しています。ですから、伊勢氏の稿は、斎藤君に取り込まれないようにがんばってと、新社会党を激励し

ているのではないですか。ところが、それが気にくわんと「偉い」人はおっしゃる。

新社会党の幹部はマルクス主義からサヨナラしているのです。4〜5年前からのバラマキ論の一つであるBI信者の行き着いた先というわけです。BIの論争が今度は斎藤君に変わったまでのことでしょう。2つに流れる本質は同じです。原野人論文集『マルクス主義・階級闘争の原則―小山・上野論争に寄せて』（本誌、No.1330、21年2月15日号）、原野人論文『カール・マルクスと向坂逸郎（1）―マルクス・向坂と斎藤』（本誌No.1346）を参照ください。後者の論文は、マルクス主義の大事な論点がぎっしりつまっています。じっくり『マルクス伝』を手にしながら。

マルクスの読み方

『資本論』の読み方には大きく2つある、あるいはあったようです。1つはこれまでもくり返し述べてきたように、マルクスは、この本の目的は「近代社会の経済的運動法則」を明らかにすることにあるといっているように『資本論』、他のマルクスの著作を忠実に、書かれているとおり繰り返し読み、全体を理解することです。

資本主義の根本的な法則は、剰余価値の法則です、資本主義的蓄積の原動力です。この理解なしに、まして否定し無視するようではマルクスを読むことになりません。無駄に読むだけ、斎藤君の「マルクス論」がこれです。ですから、斎藤君は『資本論』第一巻の第二四章にある本源的蓄積の秘密（第一節）、資本主義的蓄積の歴史的傾向の意味がわかるはずもないのです。くわしくは、本誌No.1346（10月15日）号の『マルクス・向坂と斎藤幸平』、そして今号の原野人論文を参照してください。

資本主義の経済的法則は矛盾を生みます、そして資本主義を否定する要素をつくります。矛盾は量的に発展します。しかし、この量的発展が、質的転換の要因へと発展します。このように、資本主義的蓄積の一般的法則、資本主義的蓄積の歴史的傾向は、この質的転換の要因を明らかにしているのです。

2つは、『資本論』のなかに社会主義とはなにかの「万能薬」が示されてあるのではないか、共産主義的千年王国とはなにかを知ることが出来るだろうとの読み方です。しかし、『資本論』はじめ、マルクスの著作をいくら読み返しても、社会変革のあとはどうなるかは、きわめて漠然と暗示しか与えておりません。

生産過程の資本主義的形態の矛盾と敵対を、したがって同時に新社会の形成要素と旧社会の変革要素と成熟が「（生産の資本主義的形態の止揚が）個人的所有を復興させるが、しかしそれは資本主義時代の成果を基礎としてであり、自由な労働者の協業を基礎とし、土地と労働そのものによって生産された生産手段にたいする彼らの共同所有を基礎としてである」（向坂訳『資本論』952頁）。

で「満足」しなければなりません。社会変革は客観的条件、主体的条件の変化、発展のなか、唯物史観という世界観を駆使しおこなわなければならないというのです。

レーニンの偉大さは唯物史観を駆使し社会主義政党（社会民主労働党）をつくり、革命を成功させるだけでなく、前進、発展の基礎をつくり上げたことです。

この「漠然たる暗示」を明らかにするのが『ゴータ綱領批判』での発展です。マルクスは頑健な身体をもっていました。マルクスとエンゲルスの写真を見比べてみて下さい。マルクスは大きな頭、肉太だがっちりした身体つき、エンゲルスは背は

高いけど細身で小さな頭。マルクスと比べれば一見、ひ弱です。

マルクスの頑健な体力は一日十六時間もの勉強、そして1864年に設立された国際労働者協会の活動、ヨーロッパからアメリカまでの社会主義の思想と運動、パリ・コミューン(1870年3〜5月)への関与、コミューン戦士たちの救済、社会主義をめぐる無政府主義者バクーニン等の思想・組織闘争が体力を奪っていったようです。

『資本論』第一巻の第3版発行の準備や草稿としてあった二巻、三巻の完成のため科学技術、自然科学、原始社会にかかわる最新の著作を読み厩大なノートをつくっていました。エンゲルスの手紙を通読しますと、マルクスはエンゲルスに「二、三巻を完成させてくれ」とたのんでいます。マルクスとエンゲルスに秘密はなに一つありません。でも仲違いしたことはたつた一度だけありましたが、マルクスが「ぼくが悪かった、許してくれたまえ」と、すぐに平和を回復しています。

国際労働者協会の諸文書はほとんどマルクスが書いています。マルクスの活躍ぶりをエンゲルスが「マルクス伝には国際労働者協会の活動ぶりは欠かせない」と述べているほどです。マルクスの健康がよくなかったことは1875年以降、マルクスの論稿がウント少なくなっていること、逆に執筆活動を高めたのがエンゲルスであることは全集の目次をみればわかります。1875年以降、マルクスのもっとも重要な論稿が『ゴータ綱領批判』です。

マルクス主義の『百科全書』ともいうべき『反デュリング論』はエンゲルスの著作となつていますが、マルクスは草稿を読んでいますし、第二篇経済学の『批判的歴史から』はマルクスが書いています。ですから、二人の若き時代の『聖家族』『ドイツ・イデオロギー』がそうであつたように、共著といつていいくらいです。

『ゴータ綱領批判』

斎藤君は古い共同体―これを彼はコモンという―を、「脱成長のコミューニズム」、あるいは、「エコ社会主義」の基礎にしたいと夢想します。彼は哲学者を自称しています。しかし、彼の言葉はアヤフヤで幅広く、一つひとつの言葉とその概念が緻密に考えられておりません。思考もかならずしも一貫しておりません。とにかくいいかげんなのです。利用できそうなものにダボハゼのように喰らいつくのです。とつぜん『ゴータ綱領批判』が飛び出してくる(斎藤著200頁)のはその類です。

『ゴータ綱領批判』はマルクシズムのもっとも重要な文献の一つです。ここで『ゴータ綱領批判』がなぜ書かれたかについて、簡単にふれておきましょう。ドイツにはラサール派のドイツ労働者協会とベーベルやリープクネヒトを指導者とする社会民主党の2つの労働者運動の流れがありました。労働者運動の前進は二つの流れの合同へと導き、1875年、綱領草案がつくられます。マルクス、エンゲルスは発表されるまでその内容を知りませんでした。「原則」を譲り渡している。党綱領にはふさわしくない」と二人が激しく怒ったことは手紙にあります。

マルクスは、その批判を書いたのです。しかし、公表は1882年です。当時のドイツは社会主義者取締法下であり、マルクスもエンゲルスも公然たる批判をひかえ、時の来るのを待ったのです。

ここでマルクスは政治権力を奪取した労働者階級が、どんな経済社会に直面し、ど

んな政治形態をとるか、これがどんな社会に発展し、その政治形態はどう変化するかを明らかにしているからです。たとえば――

【つぎに問題になるのは、国家制度は共産主義社会においてはどんなふうになるか？ ということである。言いかえれば、そこでは今日の国家機能に似たどんな社会的機能が残るか？ ということである。この問題にはただ科学的に答えることができるだけであって、人民ということばと国家ということばを千度も組み合わせたとこで、蚤の一跳ねほども問題に近づぎはしないのである。

資本主義社会と共産主義社会とのあいだには、前者から後者への革命的転化の時期がある、この時期に照応してまた政治上の過渡期がある。この時期の国家は、プロレタリアートの革命的独裁以外のなものでもありえない。】（全集19巻、28～29頁）

マルクスは、ここでパリ・コンミュンの経験を総括し、資本主義から社会主義への移行期は、「プロレタリアートの革命的独裁以外のなものでもない」とし、この「独裁」は階級のない社会への過渡期的性質をもつものであり、階級の消滅とともに死滅するという規定を新しく提起し、思想を発展させています。斎藤君はこれらマルクス主義の根本問題にはいっさいふれず次の一節から、わざわざ「協同的富」だけをとり出していちゃもんをつけるのです。

【共産主義社会のより高度の段階で、すなわち個人が分業に奴隷的に従属することがなくなり、それとともに精神労働と肉体労働との対立がなくなったのち、労働がたんに生活のための手段であるだけでなく、労働そのものが第一の生命欲求となったのち、個人の全面的な発展にもなつて、またその生産力も増大し、協同的富のあらゆる泉がいつそう豊かに湧きでるようになったのち――そのときはじめてブルジョア的権利の狭い視界を完全に踏みこえることができ、社会はその旗の上にこう書くことができる――各人はその能力におうじて、各人にはその必要におうじて！】（全集19巻21頁）

彼は「協同的富」という言葉は不正確、「共同体的富」と訳すべきだ（斎藤著202頁）というようにです。

マルクス、エンゲルスは社会主義、共産主義という言葉を使つてはおりません。協同組合社会、自由な国家、共同体という言葉が使われます。たとえば、『ゴータ綱領批判』では「生産手段の共有を土台とする協同組合社会」というようにです。その言葉につづく（その社会の）内部では生産者はその生産物を交換しない。同様にここでは、生産物に支出された労働がこの生産物の価値として、すなわちその生産物にそなわつた物的特性として現れることもしない」（同、19頁）と述べていることにより高度の社会の内実が示されています。より発展した共産主義社会の生産と分配の姿です。斎藤君は労働が価値の実態とはハナから考えることはありません。価値をつくるのは「希少性」「効用」と考える御仁です。マルクス経済学のイロハも知りません。たとえば、285頁では『価値』と『使用価値』の優先順位の見出しのすぐ下に、「商品の『使用価値』とは薬が病気を治す力、『価値』とは商品として薬につく値段」と小学生並みの知識しかおもちでないことを誇つていらつしやる。さらに、『使用価値』を重視する社会に移行しなければならぬ」（同）と。これが斎藤君の夢みる「共産主義」というわけです。

小さな共同体

こうみてくると、彼とおつき合いする気分が失せてくるのではないですか。彼は生産手段の「共有」という言葉をしばしば使っております。「共産主義といえば、私的所有の廃止と国有化のことだ」という誤解がはびこっているが、所有のあり方さえも根本問題ではない」（291頁）、「肝腎なのは労働とは労働と生産の変革」（同）とされるのです。ではどのように。

彼はブルードンは「流通の変革」で社会主義を実現しようとしたと批判しますが、この批判もまちがいです。ブルードンは、私有制と社会的分業を深く考えず、商品生産を残したまんまの社会主義を夢想したのです。斎藤君はマルクス経済学に無知ですから、結局はブルードンと同じように商品生産を残した社会の中に、小さな共同体（協働組合）をつくり、生産の場にまかれた小さな社会になるということです。なんとこのどかで牧歌的であることでしょうか。

この思想は『共産党宣言』第三章社会主義的および共産主義的文献と題し批判する、保守的社会主義またはブルジョア的社會主義そのものに他なりません。

みんな仲よくワーカーズ・コーポで働きましようよ、そのためには参加が必要、労働者たち自身による「社会的所有」運動が今世界にひろがりつつある、これをどんどんひろげればいい、と。
（滝野 忠・つづく）

斎藤幸平君の主張を改めて検討する

ベストセラーなどを買うには及ばない。マルクス・エンゲルス、レーニン、向坂、小林、塚本、岩井、灰原等の本は残して、歳も考え、つまらぬ本はすつかり整理・処分してあるところに、流行を追って本を買うつもりは全くない。全面的な批判は滝野忠さんにお任せしたい。

パソソンの検索から 要点は東京新聞の「あの人に迫る」（2月20日）に示されており、『社会通信』5月1日号に「牙を抜かれたマルクス主義」として批判しておいた。

検索を斜めに読んでいたら、以下のような一問一答が目についたので、改めて検討してみたい。（以下、傍線は原）

世界中で被害をもたらしている気候変動を食い止めるため、各国は「脱炭素化」へ舵を切った。そのなかでグリーン・ニューディールという、経済活動と環境保全の両立を目指す政策が先進国で取られているが、地球存続のためには経済成長そのものをやめなければ無意味だと主張する論客がいる。マルクスの思想を援用し「脱成長コミュニケーションズム」を掲げる斎藤幸平氏だ。……

そもそも経済成長なくして私たちの生活は成り立つのか。資本主義を超える「第三の道」を実現する方策を聞く。

——「脱成長コミュニケーションズム」とは一体何なのでしょう？

それを説明するには、まず、資本主義が現在どのような状況なのかを考えなければなりません。人間の経済活動というものがどんどん大きくなっていった結果、地球上どこを見渡しても、道路や建物、農地、ダム、ゴミ捨て場などという形で、人間の手

が加えられた状態になってしまっている。つまり、人類の経済活動が生み出した地層ができていて、それを「人新世」と呼ぼうという議論が地質学のなかで行われています。地層以外でも、海にはマイクロプラスチックが大量に浮かび、大気中の二酸化炭素も激増している。これも人間の経済活動、つまり資本主義のせいですよね。気候変動に代表される環境危機の犯人は資本主義なのです。いま、各国が目標とするカーボン・ニュートラル（温室効果ガスの排出量ゼロ）を2050年までに達成しようとする、これまで通りに経済成長を続けながら、技術革新だけによって二酸化炭素やその他の環境負荷を減らしていくというのは、理論としては成り立つても現実問題としては相当難しい。それが十分に早く行われるということを示す過去のデータはどこにもありません。そうすると私たちはどこかでこの無限の経済成長というものをやめていく、すなわち「脱成長」という考え方を真剣に議論すべき段階に来ているのです。

一方で、脱成長経済へ移行すべきだということ自体は、さまざまな人たちが繰り返し言ってはきたのですが、そうした議論が不十分であったのは、資本主義のもとでも脱成長は可能だという考え方だったからでした。しかし、資本主義で脱成長を唱えるのは、四角で丸を描け、というようなものです。資本主義の本質は、利潤を追求するもの、成長を求めるものだからです。だから、脱成長コミュニティが重要なのです。

ただ、誤解されやすいのですが、ソ連や中国みたいな社会は国家型資本主義です。そういう社会とは全く異なる、コモン（共有財産）を重視した社会が必要です。なぜコモンに依拠した社会が必要かというと、水とか電気とか食料とか、エッセンシャル・ワークに代表される教育や医療といった、誰もが生きていくうえで最低限必要とするものやサービス、すなわちコモンは、あらかじめみんなでシェアするような制度設計にすれば不平等が生じないからです。逆に、資本主義はコモンをどんどん解体して発展してきたシステムです。その結果として、水や電力や教育といった公共性の高い領域にも市場原理が及び、お金のない人たちはそれらへのアクセスから排除され、お金を持っている人たちはどんどん自分たちに都合のいい便利な生活をつくっていく。本来限りある資源をそうした一部のお金を持っている人たちが独占してしまうと格差などの支障が社会で生じる。それを防ぐために、最低限必要なものはみんな管理し、企業に独占させないで公的なセクターや市民が主体となってそれらをシェアしていくことが必要であり、それがむしろ豊かさの条件なのです。コミュニティやマルクスという、労働者たちが団結して革命を起こして資本家たちをぶっ潰すみたいなイメージを抱く人が多いですが、マルクス自身も晩年はそのような革命のビジョンを取っていませんでした。むしろ今の資本主義の枠内で徐々にコモンを広げていく、それによって商品経済の領域を狭め、貨幣や資本が持っている力を弱めていく。そうすると、完全には市場も貨幣もなくなりませんが、どこかで不可逆的な転換が起こり、コミュニティに相当する社会、少なくとも資本主義とはいえないような社会になるはずだと彼は言っていたのです。

——資本主義の枠内でコモンを広げるといことは結局、資本主義が残るといことでしょうか？

いえ、資本主義は終わらせなければなりません。なぜ終わらせなければいけないかというと、資本主義というマルクスの言葉を使えば無限の資本蓄積、一般的な経済学

働者国民の共有物に転化する。資本主義的生産様式は根本的に変革され、労働力は商品であることをやめる。資本家の利潤拡大のための経済成長は終わりを告げ、失業も困窮も環境破壊もない、誰もが物質的にも精神的にも豊かになる人間的な経済成長が限りなく可能となる。地球の資源は有限であつても。

空想 斎藤君も「資本主義は終わらせなければなりません」とは言いながら、他方では次のように言う。

「コムニニズムやマルクスというと、労働者たちが団結して革命を起こして資本家たちをぶつ潰すみたいなイメージを抱く人が多いですが、マルクス自身も晩年はそのような革命のビジョンを取っていませんでした。むしろ今の資本主義の枠内で徐々にコモンを広げていく、それによって商品経済の領域を狭め、貨幣や資本が持っている力を弱めていく。そうすると、完全には市場も貨幣もなくなりませんが、どこかで不可逆的な転換が起こり、コムニニズムに相当する社会、少なくとも資本主義とはいえないような社会になるはずだと彼（マルクス）は言っていたのです。」

なるほどこれは独占資本を頂点とする資本家階級には、しごく受け入れやすい構想であるが、実際には空想にすぎない。先般成立した「労働者協同組合法」には、資本主義を死守したい自民党も積極的に賛成している。他方では、国鉄や電電公社や郵政などを民営化し、コロナ禍の教訓に逆らつて国公立医療施設の民営化を進め、水道の民営化もはかる。独占資本は左手で一つのコモンを取り入れれば、右手で労働者の命や生活に必要な三つや五つものコモンを握りつぶす。

「今の資本主義の枠内で徐々にコモンを広げていく、それによって商品経済の領域を狭め、貨幣や資本が持っている力を弱めていく。・・・」などは、はかない幻想でしかない。

マルクスはこんな空想的社会主義を批判して科学的社会主義を確立したのである。サン・シモンやフリーエやオーウエンは空想的な社会主義だったとはいっても、当時では大きな歴史的進歩性を持つていた。しかしマルクス・エンゲルスによって社会主義が科学的理論となつている今日では、斎藤君の空想的社会主義は反動にしかたない。

講師 「講師、見てきたような嘘をいう」。大向こうから喝さいを浴びる斎藤君は講師に似ている。「今の資本主義の枠内で、徐々にコモン（共有財産）を広げていけば、どこかで不可逆的な転換が起こり、コムニニズムに相当する社会、少なくとも資本主義とはいえないような社会になるはずだと彼は言っていたのです。」と宣わく。わが首脳部が喜びそうな嘘・屁理屈である。

もしマルクスが本当にこんなことを言っていたとすれば、マルクスはエンゲルスと協力して、『資本論』や『ゴータ綱領批判』や『反デューリング論』の主要部を全面的に書き換えていたはずである。斎藤君はマルクスの名を語りながら、恥ずかしげもなく講師のような嘘を述べているというほかはない。なおソ連や中国がなぜ斎藤君の言う「国家型資本主義」に変質してしまったのか、その根本原因については、『社会通信』2月15日特集号「マルクス主義・階級闘争の原則」の「ソ連等の変質・崩壊の根本原因」と「ソ連や中国と日本はどう違うか」を参照されたい。（原野人）

信州松本でヴツパータール交響楽団の「英雄」を聴く

エンゲルスと「ヴツパータールだより」のことも（下）

(五) エンゲルスとトルストイとチャイコフスキーと

「自由と必然性」の問題については、エンゲルスが『反デューリング論』の中で論じられていることは案内の通りです。そして、トルストイの『戦争と平和』の「エピローグ」は、それだけで岩波文庫版の160頁を越す大作であります。トルストイはこのなかで、自由とは本来必然の法則に従属しているにもかかわらず、そのことをまだ人間自身が認識できない状態である、というように理解していますが、さすがトルストイであります。

トルストイは、チャイコフスキーの弦楽四重奏第一番の有名なアンダンテ・カンタービレ（第二楽章）を聴き、涙をながしたと言われています。また、トルストイ自身が作曲したピアノ曲「ワルツ へ長調」が残されています。このトルストイのワルツは、現代屈指の作曲家でありピアニストとしても活躍しているレーラ・アウエルバツハ——アンサンブル・オーケストラ金沢とのお付き合いで知りました——によって録音されたCDがあり、楽しむことができます。

トルストイは生涯音楽を愛し、幼少よりピアノを習い、成人してからもレッスンを受けていました。モーツアルトのソナタや、ショパンの楽曲のなかでも最大の難曲と言われるバラード第四番も弾いたといえますから、その腕は相当なものだったことが伺えます。チャイコフスキーやルビンシュタイン、タネーエフといった、当時ロシアを代表する音楽家と親しくし交流していたといえます。

というわけで、チャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲を演目に加えさせてもらいました。

この上岡敏之指揮ヴツパータール交響楽団演奏会は、2010年10月3日に松本市音楽文化ホールで開催され、日本で唯一のオリジナル・プログラムであったこともあり、ホールは県内外からの聴衆で満席となりました。

プログラム終曲の「英雄交響曲」の演奏後、上岡さんはそれこそ割れんばかりの拍手に応えてのアンコール曲は、モーツアルトの「ジュピター交響曲」の終楽章でした。

〔付記〕 トルストイと言うと、私にとって忘れられない思い出があります。ロシア文学者にして翻訳家の中村白葉先生との出会いです。

私の中学二年から高校三年までの間、伝統ある信濃木崎夏期大学の事務局長を父親が務めていました。小中学校の夏休み中に二週間程、大町市の木崎湖畔で開かれるこの夏期大学に、父は開講の準備をし、また閉校後の片づけまでを、住み込みで陣頭指揮に当たっていました。そんなわけで、私は三日に一日、大町市街地から木崎湖畔まで、自転車で父親の洗濯物を受け取りに行くのが仕事でした。湖畔で、講師として来ておられた中村白葉先生と出会ったのです。

私の勉強部屋のどこかに、頂いた色紙と本があります。尾崎紅葉を意識し、對抗するかのように「白葉」とした、というように聞きました。

高校一年生の時、学校の指定推薦するロシア映画「アンナ・カレーニナ」を観に行きました。「安保七人男」の一人である岩垂寿喜男社会党衆議院議員が、若いころ通い詰めたという中劇という映画館でした。字幕スーパ―は中村白葉とあり、あの爺ちゃんだ！と思わず声をあげそうになりました。映画は当時の私にはまったく難解であったこと、それを強烈に覚えています。

信濃木崎夏期大学では、京大の霊長類研究所を設立された今西錦司教授からは『私の自然観』（筑摩書房）なる本をいただきましたし、霊長類研究所長であった時実俊彦京大教授からは『脳の話』（岩波新書）をいただきました。当時はこうした方々が一流の学者であり文化人であるといった認識はなく、子供の私に話しかけてくれる「優しいお爺ちゃん先生」でありました。

（六）一流の音楽評論家でもあったエンゲルス

エンゲルスの音楽に関する知識は半端なく、その当時、一流の音楽評論家であったと言っても過言ではありません。次のような一文が残されています。

「ブレームンで最もすばらしいのは音楽である。ドイツの都市でこんなに多くの、しかもこんなに良い音楽が演奏されるのは、当地をおいてあまりない。都市の大きさのわりには多くの合唱団があつて、しよつちゅう催されるコンサートはいつも大入りである。ここでは音楽の趣味はほとんど完全といつてもいいほど純粹に保たれてきた。

ヘンデル、モーツアルト、ベートーヴェンなどのドイツ・クラシック作曲家、新しいところではメンデルスゾーン・バルトルディと最上のリート作曲家たちが断然優位を占めている。フランス新派を聴きに行く聴衆は、ほとんどが若い事務員だけである。ただ、セバスチャン・バッハ、グルック、ハイドンがもう少し歓迎されることが望ましいように思われる。」（『マルクス・エンゲルス全集』第41巻144～145頁）、と。今もドイツを代表する大作曲家の名前が、ずらりと列挙されているのに驚きます。

「ブレームン」といえば、キース・ジャレットの『ソロ・コンサート』中の「ブレームン・コンサート」を思い出す人もいるでしょう。ジャズのファンだけでなく、クラシック音楽愛好家からも絶大な支持を得た銘盤です。私がジャズの分野に興味を持つきっかけを作ってくれた音源です。

（七）マルクスとダンテ、リストとダンテ

学生時代に購入した、巨匠アルフレッド・ブレンデルのピアノによるリスト作曲の『巡礼の年・第2年「イタリア」』というLPレコードがあります。この7曲からなる収録曲の最後を飾るのは、「ソナタ風幻想曲「ダンテを読んで」」というもので、15分余の名曲です。なかなか良い曲です。

この曲は、信州松本の才能教育で育ち、現在東京藝術大学教授のピアニスト東誠三さん（松本ではこの名手を、「セイちゃん」とか「セイゾウさん」と、親しみを込めて呼んでいます。）のピアノで、東京文化会館で聴かせてもらったことがあります。

『巡礼の年・第2年「イタリア」』全曲演奏会でした。会場には『社会通信』発行人の滝野ご夫妻も来られていました。

ダンテといえ、思い浮かべるのは『経済学批判』の「序文」と『資本論』「第一

巻第一版序文」です。(以下は、向坂逸郎訳によります。)

まず、唯物史観の公式でも有名な『経済学批判』の「序文」の締めくくりは、「いつさいの狐疑をここにすてよ、あらゆる怯懦はここに滅びよ。」(新潮社版『マル・エン選集』第7巻、56頁)、です。

次に、『資本論』第一巻 第一版の序文」のそれは、「汝の道を行け、そして人々の語るにまかせよ！」(岩波文庫版『資本論』第一分冊、18頁)、であります。これは、共にダンテの言葉であります。

レーニンが「青年同盟の任務」のなかで、「人類の知識の総和からできたことを示す手本が、マルクス主義なのである」、と言っていることを、思い出さずにはいられません。

(2021年2月9日 中澤秀行)

〔追記〕

エンゲルスが描いたリストの肖像画」エンゲルスの描いた「リストの肖像画」というか似顔絵」が残っています。それは、エンゲルスが妹のマリーに宛てた手紙の文中で描かれたものです。この1842年4月16日付けの手紙は、リストがベルリンで演奏会を開催した時のようすを伝えているもので、リストのピアノ演奏に熱狂する「ベルリンのご婦人たち」のようすが、そして、リストの肖像画Ⅱ似顔絵を書くに至った経緯が、次のように記されています。

「リスト氏が当地に滞在していて、そのピアノ演奏で全婦人たちをうっとりさせたことは、おそらくまだおまえの耳にははいっていません。だがベルリンのご婦人たちはのぼせあがってしまい、コンサートのおさいリストが落とした手袋を奪いあつてまったくのつかみ合いをし、二人の姉妹の一人がもう一人からそれを奪ったため彼女は永遠に絶縁する破目におちいった。

シュリッペンバッツ侯爵夫人は、自分のオーデロンを床にぶちまけて、偉大なリストが茶碗に残した紅茶をオーデロンの小瓶にそそぎ入れた。それからというもの彼女はこの小瓶に封をして、永遠の思い出のために彼女の秘書に預けて、毎朝それを見てうっとりしている。そのことで掲載された漫画にそのさまが描かれている。前代未聞のけしからん話だ。若いご婦人たちは彼をひっぱりだこにしたが、ところが彼はまったくひどいことに彼女ら全員に目もくれないで、数名の学生とシャンパンを飲むほうがむしろだ。だがどの家にも偉大でやさしく、崇高で天才的で、神のようなリストの肖像が二、三枚は見られる。だが僕もおまえにその肖像を一つ書いてやろう。これはカムチャッカ人の髪形をした男だ。」(『マルクス・エンゲルス全集』第41巻514頁)、と。

(2021年8月19日 中澤秀行)

◇読者からのおたより◇

コロナ禍の今後 私の元に届いた要望の中で「飲食・観光・繊維等特定の業種に限られた支援策だけでなく、より多くの業種・業者へ拡大して支援してほしい」というものがありました。こうした声に応えるべく、この度の9月議会でも、中小事業者への支援が実現しました。今後より一層市民の暮らしの安心・安全のために課題と向き合い、市民の声をくみ取っていかねばなりません。引き続きみなさまの要望をお聞かせください。

(広島県福山市議 西本章)

支配階級の意思が貫徹 大変な状況の中、お疲れ様です。子宮頸がんワクチンの反省なき推進が進められています。コロナワクチンの現状に合わせて復活させようというのでしょうか。支配階級の意思

ひとの人生を奪う暴挙の反省は、この国ではどのようになされるのでしょうか。支配階級の意思が貫徹される動きに、私たちは、どう声をあげ動きを作っていたらよいのでしょうか。

混乱する時代の当事者として何をなすべきか、いつも逡巡するばかりです。

(藪芳郎)

気づいて欲しい 「生まれてすぐから1歳になるまでに、15回分ものワクチン接種のお知らせが届く」、「昔は、子どものうつる病気は、予防するものではなく、かかって強くなるものだった」と。

『子どもと親のためのワクチン読本』(母里啓子著・双葉社)を読み知った。著者は1934年生、医師・保健所所長・国立公衆衛生院感染室長、ワクチン改良にもかわり「全国予防接種被害者の会」との交流も半世紀。病気とワクチンの解説わかりやすい。国のワクチン政策で赤ちゃんと犠牲になった予防接種裁判は26年の歳月を費やし、過ちを認めさせるには長い闘いになる。今、あたりまえに打っているワクチン、おかしいなどちよつとも気づいて欲しいと訴えている。(滝野嘉津子)

農民切り捨て政治を許さない 思い出の郵便ポスト・ちよつとひと休み号(2021年10月10日)裏面は我が家の水田風景、「こしひかり」をつくっています。9月末にはコンバインによる稲刈り作業も終わりのよい出荷という時期になりました。

9月30日の地元紙では昨年より16%買い取り価格値下げと。自民党さん農民票はいらぬということでしょう。中小零細切り捨ての政治を許すわけにはいきません。

(思い出の郵便ポスト・ちよつとひと休み号2021年10月23日号)裏面は我が家のりんご畑の「ふじ」の樹です。8月に褐斑病(かっぱんびょう)という病斑発生。本来緑色の葉が黄色くなりハラハラと落葉。緑の葉で光合成が行なわれ、幹や果実に養分を送りおいしい果実ができます。今年は裏面のように果実がむき出し状態です。毎日りんご畑で、蜜入り、赤いりんごへの着色管理に向けて仕事に育んでいます。

(長野県飯綱町 山浦隆芳)

編集部だより 「はじめの一步」 — 21年総選挙について

「はじめの一步」の選挙結果がでた。「はじめの一步」というのは、小選挙区制導入(1994年)小選挙区制のもとでの第1回選挙(1996年)から4半世紀たち、ようやくと野党が「自民を政権から引きずり下ろすには、1つになって闘う他ない」の理念が、実践に移されたことである、頭ではわかっていても、実行に移すことはそれほど難しいかである。

共闘を歓迎した、自・公の敗北を期待した。結果が出た。自民は思ったほど負けなかった。公明は増やした。どれほど増やすか期待した立憲は数を減らし、国民は一つ数を増やした。共闘を野党のどまん中で推進した共産は増やせなかった。コレカラ、がんばれの結果である。

各紙(11月1日付)一面見出しは「自民伸びず過半数は維持 立憲後退共闘生かせず 維新3倍超」(朝日)、「自民単独過半数 野党共闘伸びず立憲後退 甘利幹事長敗れ辞意」(東京)、「自民単独過半数 野党共闘振るわず 維新躍進3党に」(読売)、「自民が単独過半数 与党が絶対安定多数 維新に勢い、大幅増」(日経)、「沖繩一区赤峰3選共産比例8議席確保 野党共闘が効果 自民大物落選相次ぐ(午前0時15分現在)」(赤旗)

共闘の楽しみは一プラス一が二になるか三になるか、さらにかげ算として作用するか、それともマイナスにかである。共闘がかげ算(相乗効果)になるには、燃えるような熱気、地域からの大衆運動の高揚、主導政党のヘゲモニーと団結が求められる。

総選挙の焦点は労働者、勤労階層の貧困にどう立ち向かうか、自然災害コロナは、貧乏人が貧乏になるほど資本家は豊になるといふ、資本主義の経済法則が明らかになったことである。情勢は資本主義社会の新しい社会への転換を求めている。社会主義を政治のテーマにすえるときである。

「はじめの一步」は苦しい結果となった。闘いは資本主義が終わるまでつづく。この一步を次の飛躍にすることだ。